

FD 報告書（2005年度第2回）

日 時：2005年11月9日（水）

場 所：国際言語文化棟 A 会議室

報告者：前野みち子

テーマ：日言文入試改革について

18年度の博士前期課程入試に見る問題点

- 1) 文化系講座および応用言語学講座の第一志望者が少ない。今年度は中国人留学生が研究生を経ずに直接受験できるように配慮したにもかかわらず、昨年同様、受験者が定員の半数程度という結果に終わった。
- 2) 日言文専攻の全受験者に占める留学生の割合が非常に高く、日本人受験者が減る傾向にある。これまで日本語関係の講座では日本人がもっと多かったが、最近ではポストの関係もあってか、日本人受験者が減っているため、専攻全体の問題として考える必要がある。

留学生が大部分を占めるこの専攻の現状は、教育する側にとっても学ぶ側にとっても望ましい環境とはいえない。またこの研究科の評価にとってもマイナスである。

改善案

a) 広報活動

* HPを充実させる（インターネットの効果は？）

* 研究科説明会の実施（東京説明会などを催している研究科もあると聞く）

b) 公開講座の活用

他部局・他大学では、公開講座が受験生集めの一つ的手段として使われている

c) 入試内容の見直し

現行の入試 第一外国語：読解90分、ヒアリング30分（計120点）

第二外国語：読解60分（80点）、辞書持ち込み可

論述4問選択120分（200点）

口述（200点）

他の文系研究科と比較して、日言文では試験全体に外国語の占めるウエイトが非常に大きいことが分る。これは旧言語文化部をベースに発足した組織として、当初は外国語能力を重視する教育を看板にした経緯によるものと思われるが、とくに日本語や日本文化の研究をめざす日言文の受験生にとっては、留学生にも日本人学生にも受験しにくい試験内容になっている。

とりわけ、学部で卒論に取り組んでいる日本人学生の受験者を期待するとすれば、日本語・日本文化に関心を持つ彼らにとって、卒論に取り組みながら同時に外国語の能力を高めることはかなり困難である。

入試改善案

* 外国語を一つにする

日本人：外国語（ヒアリングを含まない）、辞書持ち込み可／不可

留学生：日本語のみ（ヒアリングを含む）

（留意点）以前の議論では、言語を専攻する場合には英語能力が不可欠という意見があった。講座によって英語を指定外国語とすることができるか、その場合、留学生にはどう対処するか？

* 論述試験の問題数を減らす

これは、とくに文化系講座に当てはまるのかもしれないが、考えをまとめて記述するのにかなりの時間を要するので、一問に一時間ぐらいが適当ではないか？

* 卒論要旨あるいは卒論などの論文を評価し、外国語の点数を補う、あるいは外国語に代える道をひらく。

この場合、試験方式が複雑になるので、それにうまく対処できるかどうかも問題。ただし、博論までをめざす研究心旺盛な学生を採るためには、この方式はかなり有効ではないか？（学部のある研究科ではしばしば卒論の出来が大学院入試に大きな影響力をもっていることも考慮したい。）